

大江戸商売繁盛記

— 所蔵貴重資料から —

平成二十二年年度

一橋大学附属図書館

・慶應義塾図書館共同企画展示

絵でみる江戸の風景

慶應義塾図書館の所蔵資料から

慶應義塾図書館は、慶應義塾大学三田キャンパスにある人文・社会科学系の図書館で、各分野の専門書のほか多数の個人文庫を所蔵している。重要文化財を含む国内外の貴重資料は約2万余点にのぼり、世界的に稀少な資料も多い。特に江戸時代初期以前の古写本・古刊本を中心に、浮世絵、絵図等の資料が充実している。今回の展示では、当時の江戸の町を具体的に想像できるように鳥瞰図、錦絵、古銭などの目で見えてわかりやすい資料を出品した。



慶應義塾図書館所蔵

江戸鳥瞰図 鋏形蕙斎画 須原屋伊八 江戸後期刊 1枚

本所付近からの江戸全景の鳥瞰図で、西洋から伝わった一点透視図法でリアルな江戸の都市が描かれている。図の中央あたりに日本橋があり、隅田川越しに西方の遙か彼方に富士山を臨むことができる。鋏形蕙斎(北尾政美 1764-1824)は浮世絵師北尾重政に師事し、江戸後期に活躍した。本図を元に作成された肉筆に『江戸一目図屏風』(津山郷土博物館蔵)がある。



新版浮繪江戸日本橋市中之圖 溪斎英泉画 江戸 総州屋興兵衛 江戸後期刊 1枚

日本橋が架けられたのは慶長8年(1603)で、日本橋川を中心に交通が発達し、米や塩、材木などの問屋が軒を連ねた。東海道をはじめとする五街道の起点でもあり、図からは当時の賑わいぶりがうかがえる。溪斎英泉(1790-1848)は美人画で名を馳せたが、歌川広重とともに『木曾街道六十九次』など風景画(名所絵)も残している。

慶應義塾図書館所蔵

木綿店の資料から

一橋大学附属図書館の所蔵資料から

明治8年(1875)に設立された商法講習所を源流とする一橋大学は、明治時代以来、学術研究を目的として歴史的な資料を収集してきた。それらはすべて関東大震災や戦災をくぐり抜け、今日まで伝わっている。

今回の展示では、一橋大学附属図書館の誇る「大伝馬町長谷川木綿店古帳」と「札差関係資料」を中心に、江戸時代の商業に関する資料を出品した。

商品流通の構造

江戸や大坂といった巨大な消費地の需要は、全国から流入する大量の物資によって満たされていた。流通網の整備に伴い、遠隔地の商品は生産者→産地の仲買→問屋→消費地の仲買を経て消費者の元に届くようになった。

江戸時代初期の問屋は自ら商品を購入することはなく、荷主から委託された商品を保管・販売して手数料を受け取った。このような仲介的な役割を果たした問屋を荷受問屋という。しかし次第に自己資金で商品を仕入れて卸売する仕入問屋が台頭し、荷受問屋は衰退していった。



一橋大学附属図書館所蔵

江戸買物獨案内 文政7年刊
江戸時代の買い物ガイドブック。大伝馬町の木綿問屋が21軒掲載されている。

大伝馬町太物問屋仲間

貞享3年(1686)、大伝馬町(現在の中央区日本橋大伝馬町にあたる)に集住する太物仲買70軒が太物問屋を名乗り、大伝馬町太物問屋仲間(同業者の組合)を結成した。「太物(ふとももの)」とは、綿織物や麻織物など太い糸で織られる織物の総称である。それに対し、細い絹糸で織られる絹織物は「呉服」と呼ばれた。

太物問屋は仲間結成以前にも4軒存在したが、彼らは荷物を引き受けるだけの荷受問屋であった。一方、新たに結成された大伝馬町太物問屋仲間は仲買を兼ねた仕入問屋で、木綿の流通から販売までを支配した。仕入問屋に経営を圧迫された4軒の荷受問屋はまもなく経営不振に陥り、1軒を除いて18世紀前半に姿を消した。

長谷川木綿店

大伝馬町長谷川木綿店古帳は、太物問屋を営んだ伊勢松坂の豪商長谷川家に伝来した資料である。

松坂を本拠とする長谷川家は、延宝2年(1674)に江戸で太物仲買店を開設。大伝馬町太物問屋仲間が結成された貞享3年(1686)に太物問屋へ転じた。その後次第に分店・分家店を増やし、天明3年(1783)には合わせて5店の江戸店を有するに至っている。



一橋大学附属図書館所蔵

大福帳 江戸後期
分家店亀屋武右衛門の経営帳簿。亀屋は本店・新店に続き、享保10年(1725)に開業した。

コシノ海運

江戸時代の海運は、河村瑞賢による東廻海運・西廻海運の刷新のもと、参勤交代と大都市への物資供給を背景に急速に発展した。

元禄7年(1694)、大坂・江戸間の商品輸送を円滑に行うため、江



改正日本船路細見記 天保13年刊

一橋大学附属図書館所蔵

戸では十組問屋が、大坂では二十四組問屋が結成された。これら問屋仲間は菱垣廻船を共同所有し、廻船問屋運営の監督をも行ったため、菱垣廻船は大坂と江戸をつなぐ輸送手段の主力となった。ところが、享保15年(1730)、酒問屋が十組問屋から脱退して酒荷を専門に扱う樽廻船仲間を組織した。酒は腐敗しやすいため輸送日数の短縮が求められたことが脱退の主な理由であるが、酒問屋の間に海損時の負担のあり方に対する不満が高まっていたことも理由の一つであった。このうち、酒は樽廻船、そのほかの商品は全て菱垣廻船という積荷協定が取り決められたが、樽廻船は船足が速く低運賃だったため、協定は次第に守られなくなり、やがて菱垣廻船を圧倒していった。

これに対し、文化5年(1807)、菱垣廻船の再興と問屋仲間の利益確保を目的に、江戸入津の全商品を独占的に扱う菱垣廻船積問屋仲間が結成された。この仲間は十組問屋以外の問屋商人も取り込み、大伝馬町太物問屋もまたこれに加入することにより、菱垣廻船の積荷確保に協力した。さらに天保4年(1833)には、特定の7品と酒以外は樽廻船への搭載を禁止する命令(「菱垣廻船一方積」)が発せられ、菱垣廻船は一時的にその輸送量を回復した。しかしその後、北前船、尾州廻船などの民間廻船集団が買積方式で利益をあげたことや、天保の改革における株仲間の解散で独自の特権がなくなったことにより、菱垣廻船は衰退していったのであった。



一橋大学附属図書館所蔵

指引帳 江戸前期～天保13年
大伝馬町太物問屋仲間はおよそ170年間にわたり、仲間の重要事項をこの『指引帳』に書き継いだ。

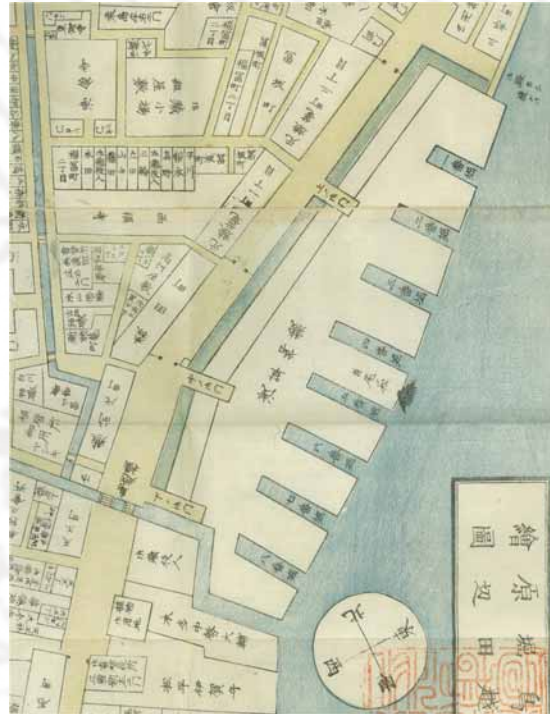
札差 ー江戸の金融商人ー

札差とは

徳川將軍家に仕える旗本・御家人の多くは、幕府が年貢として全国の直轄領から徴収した米(蔵米という)を現物支給された。その量は自分たちが必要とする量よりも多かったので、彼らは米を売却して現金を入手した。その際に換金作業を請け負ったのが、「札差(ふださし)」と呼ばれる商人である。

札差は顧客の旗本・御家人から預かった蔵米請取手形(札)を割竹にはさみ、役所前のわら束に差して順番に蔵米を受け取った。札差という名称はここに由来するといわれている。

札差の本来の生業は蔵米の換金であったが、彼らは次第に支給予定の蔵米を担保とする金融業に乗り出してゆく。年20%前後に上る利率に旗本・御家人が苦しむ一方、札差は莫大な富を蓄積し、江戸随一の豪商としてその名をとどろかせることとなった。



一橋大学附属図書館所蔵

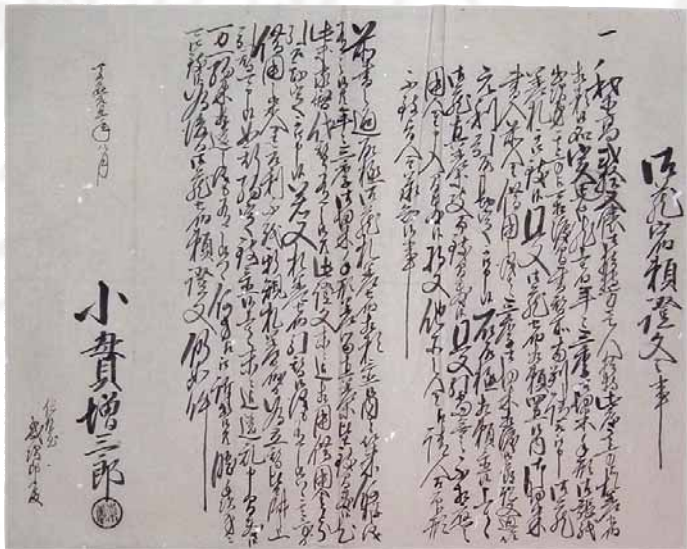
改正御江戸切絵図 嘉永3年刊

幕府の米蔵は現在の台東区蔵前にあり、札差はその周辺に居住した。上図の櫛のような部分が幕府の米蔵である。

棄捐令

松平定信による寛政の改革では、旗本・御家人の窮乏の原因は札差の高利にあるとして、6年以上前の借金はすべて帳消し、5年以内のものも利率を大幅に引き下げられた。この一連の政策は、「棄捐令」として知られている。

帳消しとなった借金の総額は、およそ120万両に及んだ。これを単純に現在の貨幣価値に置き換えるのは不可能だが、当時の米価を元に換算すれば480億円になる。札差たちは、これでは家業を続けることができず、家族の生活も立ち行かないと撤回を嘆願したものの、聞き入れられることはなかった。



一橋大学附属図書館所蔵

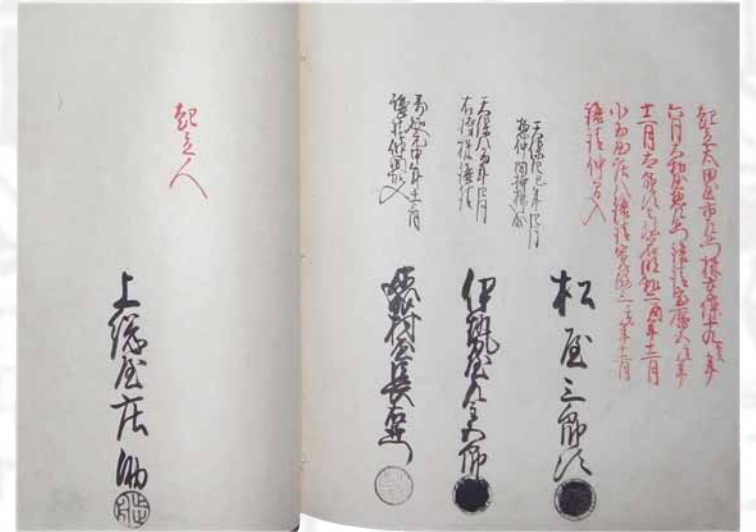
御蔵宿頼証文 慶応元年8月

御家人が札差に換金作業を委託した証文。武士の方が社会的立場が上のため、自分が借用者であるにもかかわらず、自分の名前を大きく、札差の名前を小さく下方に記している。

札差仲間

享保9年(1724)7月、109名の札差が株仲間(株仲間)の結成を江戸南町奉行大岡越前守忠相に願い出、許可された。これによって札差の業務は札差株を有する109名しか営めないこととなり、以後、彼らは旗本・御家人に対する金融を独占した。

札差業を営む権利(札差株)は売買の対象となり、早いものは仲間結成の2年後に売却されている。商売の浮き沈みは激しく、享保9年から幕末まで代々札差業を営んだのは20家ほどであった。



一橋大学附属図書館所蔵

札差仲間株帳 文政9年

札差株の台帳。左の上総屋庄助が享保9年(1724)以来代々家業を続けているのに対し、右の株は幾度も売買されており、札差の経営が必ずしも安定していなかったことがわかる。

コラム 米の流通

米は江戸時代の最も重要な商品であった。領主は徴収した年貢米を、家臣は支給された俸禄米を、また農民は年貢を納めた後に手元に残った米を売却したため、大量の米が国内市場に流通した。

江戸への米の流入ルートは、幕府米、藩米などの別によって異なっていた。幕府米は大半が江戸へ廻送され、そこから旗本・御家人への俸禄米が支給された。この俸禄米の換金作業に携わったのが、札差である。幕府が民間に売却する米は「払米」と呼ばれ、用達商人によって貨幣に換金された。一方、藩米は原則として大坂へ廻送されたが、仙台藩は例外的に江戸への廻送が認められていた。同藩は早くから米の専売制度「買米制度」を実施し、文化9年(1812)には、「米切手」の発行を幕府から認められた。

「米切手」を用いることで、それまで仙台藩から米を引き取って販売していた米仲買は、実物を引き取ることなく販売することが可能となった。

「米価安諸色高」と言われた享保期以降、幕府は、米価下落による米の売却益減少への対策として政策的に米価を調節することを試みた。貯穀奨励や廻米制限を行い、すでに元禄の頃から存在していた大坂堂島米市場を公認の先物取引市場とすることで、全国の米価を平準化しようとしたのである。食料であると同時に、諸物価の基準でもあった米は、経済のみならず政治とも密接に絡み合っていたと言える。



一橋大学附属図書館所蔵

物流の様手と貨幣

商品の流通と当時の貨幣

大坂から江戸へ運ばれた物資の中で主要なもののひとつが綿であった。その輸送スピードを競う菱垣廻船のレース(新綿番船)の様子を描いた錦絵から当時の海運の雰囲気伝わってくる。また江戸時代の貨幣コレクションからは、金銀銅の三つの貨幣が同時に流通した江戸時代の複雑な貨幣制度の実際がうかがえる。



慶應義塾図書館所蔵

菱垣新綿番船川口出帆之圖 一毫齋芳豊画 江戸末期刊 三枚続の合貼1枚

大坂・安治川口における菱垣廻船の新綿番船出帆の図である。新綿番船とは、毎年秋にその年の新綿を大坂から江戸へ競争で運送した菱垣廻船の年中行事のことで、元禄頃に始まり明治初期まで続いた。各問屋の名誉をかけたレースだったため、どの問屋も最新鋭の性能をもった船を出した。絵には菱垣廻船問屋や樽廻船問屋の倉庫群も描かれている。



古金銀貨幣コレクション

江戸時代の古金銀貨幣コレクションで、恩賞、贈答用の大判金から携帯に便利で重宝された豆板銀、藩で発行した藩札まで幅広く収集したもの。享保大判金、天保五両判金、慶長小判金、元禄小判金、南緯二朱銀、丁銀、豆板銀、藩札など。



慶應義塾図書館所蔵

コトバ 魚市場

米問屋や米仲買の倉庫や店がひしめく米河岸は、日本橋の本船町を中心とした地区にあった。そのちょうど背中合わせの場所に位置したのが日本橋魚市場である。

江戸時代の魚介類の商取引は、「魚問屋」が「浜方」と呼ばれた魚荷の売り手から魚介類を買い取って、「仲買」に売却し、その「仲買」は棒手振などの「小売



江戸名所図会 天保5年刊

一橋大学附属図書館所蔵

商」に販売するという方法で行われていた。取引の場であった魚市場のにぎわいは、『江戸名所図会』によく表現されている。

魚市場の歴史は、天正18年(1590)、徳川家康の江戸入府の際に、摂津国西成郡佃村(現在の大阪市西淀川区佃)から移住した名主をはじめ漁夫30名余りが日本橋河畔(のちの本小田原町)を拝領し、売場を開設したのが始まりといわれている。その後、日本橋内外に魚問屋仲間が増加し、享保6年(1721)に芝金杉町、本芝町の問屋仲間が結成を公認されたことで、鮮魚を扱う七組の問屋仲間が出揃った。この七組の問屋仲間は魚荷の取引を独占したが、やがてこの七組を中心とした流通システムは解体へと追い込まれていくことになる。その原因は、幕府への納魚が厳しく行われ、問屋仲間にかかる負担が大きかったこと、魚問屋仲間に支配されない自由な取引が求められるようになったことなどがあげられる。

展示

会期：2010年11月4日(木)～19日(金)
(13日(土)は閉室)
開室時間：9時30分～16時30分(閉室17時)
※ 入場無料
会場：一橋大学附属図書館公開展示室
(西キャンパス・時計台棟1階)
主催：一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館

講演会

講師：井奥成彦氏(慶應義塾大学文学部教授)
「近世後期の江戸商業—上方依存脱却への道—」
市川寛明氏(江戸東京博物館学芸員)
「木綿問屋長谷川家の経営と大伝馬町」
日時：2010年11月14日(日)
13時開場・13時30分開演
会場：一橋大学附属図書館大閲覧室
(西キャンパス・時計台棟2階)
※ 入場無料(先着150名)
※ 12時～12時30分および講演会終了後に
展示会場にてギャラリートークを行います。

2010年11月4日発行
一橋大学附属図書館
〒186-8602 東京都国立市中2-1
TEL：042-580-8252/FAX：042-580-8232
慶應義塾図書館
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
TEL：03-5427-1625/FAX：03-5484-7780

※本パンフレットに掲載された文章、写真、図版等の著作権は、特記あるものを除いて一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館に属します。著作権者からの許諾を得ずに、著作権法の定める範囲を超えて、引用、複写、電子媒体化等を行うことは、禁止されています。

平成22年度一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館共同企画展示
「大江戸商売繁盛記―所蔵貴重資料から」パンフレット正誤表

ページ・行	誤	正
p.2 下から8行目	総州屋興兵衛	総州屋與兵衛
p.4 下から4行目	7品	11品
p.6 上から2～4行目	享保9年(1724)7月、109名の札差が株仲間の結成を江戸南町奉行大岡越前守忠相に願い出、許可された。	109名の札差は享保8年(1723)に株仲間の結成を江戸南町奉行の大岡越前守番所に願い出、吟味の結果、翌9年7月に許可された。